

2 角塚型石室の形態と変遷

佐伯 麗

1 研究史と本稿の目的

研究史 横穴式石室の研究は数多く存在するが、地域によってその多寡と精粗が異なる。四国における横穴式石室研究は一部を除けば行き届いているとは言い難い状況であった。本稿で取り上げる角塚型石室の標識となる角塚古墳は香川県観音寺市(旧大野原町)にある。その周辺にある椀貸塚古墳・平塚古墳とあわせ、大野原三古墳と呼ばれる。これらは古墳時代後期後半から終末期における四国最大規模墳にも関わらず、研究はほとんど行われれず、調査もようやく緒に就いたばかりである。

そのような状況の中でも、山崎信二は早くから西日本の横穴式石室資料を収集し、各地域特有の横穴式石室を抽出しつつ、地域間関係について言及している(山崎1985)。その中で角塚型の変遷について述べている。角塚古墳の石室は、大型石材を用いた両袖式の石室で、玄室の奥壁及び右側壁に一枚石を使用し、左側壁においても二枚の石で構成され、平天井を持つ石室である。玄門の構造は玄門立柱が内側に張り出す山崎分類A b型をなす。山崎はこの石室に類似した石室を中・四国地域から6基もとめ、これらを角塚型と呼んだ。角塚型石室は30から40年程度の年代差をもち、瀬戸内海沿岸に広く分布していることを指摘した上で、それらの時期的変化の方向性を示している。そこでは側壁の段数と羨道幅指数を基準とし3時期に区別している。この変化の方向性は基本的に正しく、本稿でも追随するところが多い。ただ、当時は調査が行われた古墳がきわめて少なく、伴出する土器資料には恵まれていなかったので時期の比定は修正の必要がある。また角塚型に属する石室は山崎が挙げた他にも複数基存在し、数の増加につれ角塚型の細分の可能性が浮上した。

清家章は山崎のいう角塚型の石室に明確な定義がないことを指摘し、「袖石が羨道部に突出する両袖の石室であり、袖部の天井と同じ高さである山崎分類のA b型を基本とし、角塚古墳の石室に類する石室である。」とまとめた(清家2007: pp. 454)。また、角塚型の時期的変化については、玄室幅に対する玄室高の百分率「玄室高指数」から角塚型石室を3段階に分けた。山崎と同じ3段階案であるが、玄室高指数はよりシャープに時期差を反映するという。また大久保は角塚型を含む大型石室を前壁の構造から編年を行っている(大久保2009)。

橋本達也は、中・四国地域にあって角塚型石室はそれぞれの地域において横穴式石室の最後

を飾っていることを指摘する（橋本2001）。清家も角塚型石室の分布が、それまでの瀬戸内交流を担っていた勢力の分布と異なることを指摘し、瀬戸内交流を担う新興勢力の存在を主張する（清家2011）。

本稿の目的 このように角塚型石室は後期後半から終末期前半の中・四国の政治的関係や交流関係を反映する可能性が示されており、注目される。上記の通り、中・四国地域において角塚型石室の要素を持つ古墳はこれまで研究されてきたもの以外にも存在する。それらを含めて編年を行う必要があるし、可能であればさらなる細分を進めるべきである。政治的関係や交流関係を問うには細かな変遷が不可欠だからである。そのため、本稿ではこれまで触れられてこなかった石室を新たに加えた上で、時期的変化の方向性を示す指標を抽出し、編年を行う。さらに角塚型石室の中にも系統差があることを示し、これまでの編年をより詳細にする作業を行う。また、系統差の意味するところを考察する。

本稿において対象とする角塚型石室は角塚古墳・愛媛県四国中央市宇摩向山古墳・宝洞山1号墳・原峯1号墳・愛媛県宇和島市檜木駄場古墳・松ノ本古墳・愛媛県今治市七間塚古墳・徳島県徳島市穴不動古墳・高知県高知市朝倉古墳・広島県豊田郡梅木平古墳・深安郡大坊古墳・山口県防府市岩島1号墳の12基である。

2 時間的変化の指標

（1）分析の方法

本章では、まず角塚型石室を2系統に分類する。その上で、先行研究で行われた非計測的属性による分析、さらに各種指数を用いた計測的属性による分析を行う。山崎（1985）や清家（2007）によって分析された属性に加え、畿内型石室の諸特徴を明示する際に用いられる計測的属性（白石1966・太田1997）を角塚型でも分析することによって、どの指標が時間的変化を明確に示すのかを見てみることにしよう。

なお、各種指数は発掘で判明した数値はそれを用い、未発掘のものは現状の数値を使用している。未発掘の石室は発掘の結果、今後数値が変わる可能性が大きい、とりあえずその数値を利用して分析を試みる。発掘の結果、数値が多少変化しても石室の変遷に支障を来さないほどの明瞭な差異を示す属性を得られるとの見通しを持っているからである。

（2）角塚型石室の2系統－横横系と横縦系

まず、角塚型石室を2系統に分けることを提案したい。従来一括して扱ってきた石室を2つの系統に細分することで、より明確な変遷を明らかにすることができると考える。玄室側石の配置、とくに側石第1段目の石材配列に着目する。角塚型に限らず横穴式石室は、時期が下るにしたがって、段数が減り巨石化が図られる。とくに第1段目の石材は大型化し、石室構造を

規定する大きな要素となる。また平面形を規定する石材であるので石室を分類する際には重要な要素である。

角塚型石室の側石をみると、その並びにバラエティが認められる。玄室側壁1段目において横長の巨石を2石置く石室と、奥壁側から横長に1石と縦長に1石置くタイプの2グループに細分できる。前者を「横横系」、後者を「横縦系」と呼称する。横横系に属する石室を持つ古墳には、檜木駄場古墳・朝倉古墳・穴不動古墳・大坊古墳がある。梅木平古墳・松ノ本古墳・七間塚古墳らは第1段目に3石以上が置かれるが、石材は基本的に横長であるので横横系に分類する。横縦系に属する石室を持つ古墳は原峯1号墳・宝洞山1号墳・岩畠1号墳・宇摩向山古墳・角塚古墳である。

以上のように2系統に細分し、非計測的属性と計測的属性による分析を以下で行う。

(3) 非計測的属性による時期差

山崎の分類(山崎1985:p.363)にしたがって、側壁の段数を軸に12基の石室を3時期の区分に当てはめていく。側石の段数に関して上記2系統で大きな違いはなく、横横系と横縦系をまとめて3時期に分けることができる。

第1段階は玄室側壁を3段から4段で構成しており、玄室側壁に用いる石材のうちもっとも大きな石材は一辺3メートル級の石材を用いる。石材と石材の間を埋めるため小型の石材や小石を多く使用しており、石室内で石材の大きさの差が激しい。玄門立柱は基本的に羨道部と同じ高さに作られている。この条件に当てはまる石室を持つ古墳は、梅木平古墳・松ノ本古墳・原峯1号墳・宝洞山1号墳・七間塚古墳・岩畠1号墳である。

第2段階では玄室側壁は2段を原則とし一部が3段で構成されている。玄室側面は奥壁側1段目の石材に巨石を用いる。第1段階に比べ全体の石材が大型化し、配置も安定感を持つようになる。この条件に当てはまる石室を持つ古墳は、宇摩向山古墳・檜木駄場古墳・朝倉古墳で

表1 角塚型石室の計測データ

石室名	玄室長(m)	玄室幅(m)	玄室高(m)	羨道長(m)	羨道幅(m)	羨道高(m)	玄室面積(m ²)
梅木平古墳	6.5	2.9	4.2	7.0	2.4	2.6	18.8
松ノ本古墳	3.9	1.4	1.2				5.3
原峯1号墳	4.7	2.0	2.3	2.5	1.5	1.3	9.4
宝洞山1号墳	4.9	2.2	2.5	7.3	1.6	1.6	5.3
七間塚古墳	5.8	2.2	2.3	4.3	1.7	1.2	14.5
岩畠1号墳	4.6	2.6	2.8	5.4	2.0	1.6	12
檜木駄場古墳	3.6	1.8	1.6	3.2	1.5	1.5	6.4
朝倉古墳	5.2	2.5	2.5	3.1	1.9	1.7	13.0
宇摩向山古墳	4.0	2.4	2.6	7.0	2.2	1.7	9.6
角塚古墳	4.3	2.5	2.3	5.7	2.2	1.8	10.7
穴不動古墳	4.3	2.2	2.0	4.0	2.0	1.8	9.5
大坊古墳	5.3	2.5	1.9	5.7	2.3	2.0	13.2

ある。

第3段階は玄室側壁を1段から2段で構成し、大型石材のみで造られるようになる。小型の石材はほとんど用いられなくなり、2石の巨石を軸にしている。この条件に当てはまる石室を持つ古墳は、角塚古墳・穴不動古墳・大坊古墳である。

（4）計測的属性による分析

以下では、角塚型石室の各指数を系統ごとに求め、その指数の変化が山崎の分類とどのように適合するかを見ていくことにしよう（図1・2）。

①玄室幅指数

横横系：全体では34から51の値を示す。第1段階から第3段階にかけて上昇傾向にあり、第3段階で穴不動古墳が最高値を示すと、大坊古墳では下降していく。梅木平古墳は、第1段階でも古相と考えられるにも関わらず、44という高い数値を示している。これは梅木平古墳が角塚型というよりもその前身である平塚型に近い形態であるため、異なる特徴を示していると考えられる。第3段階の大坊古墳で下降していくのは、横横系角塚型における変化の画期がそれ以前にあったということを示している。

横縦系：全体で42から60の値を示す。第1段階から第2段階までは指数が徐々に上昇し、第3段階になると急激に下降する。横縦系の場合も第2段階の宇摩向山古墳で60という高い値を示し、第3段階の角塚古墳で下降していく様子が見てとれる。

横横系と横縦系の玄室幅指数を比較すると、第1段階は上昇の過程であり、第2段階で一定の高い数値を示す。そして第3段階で下降していくといった共通性を持っている。玄室幅指数は2系統に区分した場合も時期的変化の方向性は同じであるといえることができる。

②羨道幅指数

横横系：全体では77から92の値を示す。第1段階から第2段階にかけては数値に傾向は見られないが、第3段階の2基は90以上の高い値を示すという共通性を持っている。

横縦系：全体では72から91の値を示す。第1段階から第2段階にかけて上昇していき、第3段階になると下降する。これは玄室幅指数と同様の流れを持っているといえよう。

羨道幅指数は山崎が角塚型の変遷を見ていく際に重視した指数である。しかし2系統を比べると、横横系はあまり傾向がみられないが、横縦系は変化が顕著にみられるという違いが明らかになった。

③玄室・羨道長指数

横横系：92から167の値を示す。羨道部の計測データが正確ではない松ノ本古墳を含んでいるためか、グラフからは顕著な傾向は見られない。しかし松ノ本古墳と朝倉古墳を除く数値では92から134までの間を緩やかに下降しているため、傾向が全くないとはいきれない部分もあるが、本稿では前章で紹介した12基の石室を対象とするため、玄室・羨

道長指数は参考として扱う。

横縦系：全体で57から188の値を示す。第1段階の原峯1号墳は非常に高い数値を出しているが、その他は50から90の間にある。原峯1号墳の場合、横横系の梅木平古墳と同じように前身の要素が残っていることに原因が求められるかもしれない。

羨道幅指数同様、正確な計測データでないため参考として扱わざるを得ないが、横横系に比べ横縦系の方が明瞭な変化の傾向を見せているということを参考として挙げておこう。

④玄室高指数①

羨道の高さを玄室の高さで割り、百分比で表した指数である。

横横系：全体では52から105の値を示す。第1段階から第2段階にかけては数値に傾向は見られないが、第3段階になると90以上の高い値を示す。

横縦系：全体では56から78の値を示す。第1段階から第3段階にかけて緩やかな上昇傾向にあり、横縦系の時期的変化の方向性を如実に表している。

玄室高指数①では、2系統の違いがよくわかるグラフを得ることとなった。

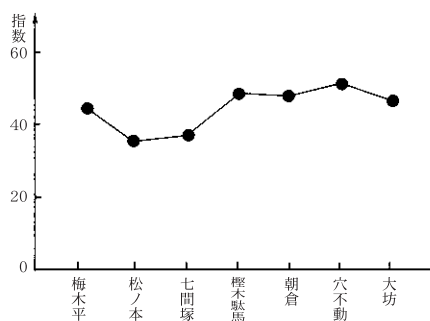
⑤玄室高指数②

玄室高を玄室幅で割り、百分比で表した指数である。

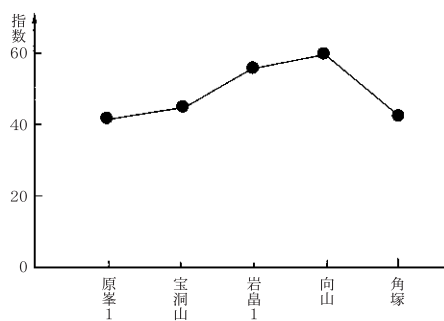
横横系：全体では76から144の値を示す。梅木平古墳の数値が突出している。これも前述の通り、角塚型の前身にあたるものであるため他の横横系とは異なった傾向を示しているものである。梅木平古墳を除いては緩やかな下降傾向にある。

横縦系：全体では92から115の値を示す。横横系と同じく第1段階から第3段階にかけて緩やかな下降傾向にあるが、数値はおおよそ100を越えており、2系統の違いを表している。

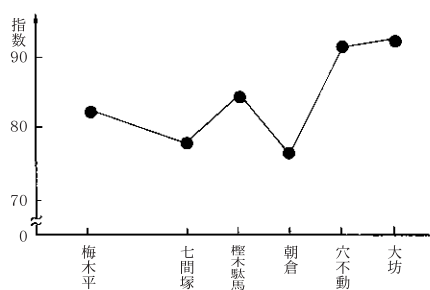
ここまで2系統に細分し、各種指数をもって時期的変化の方向性をシャープに表しているものが何であるのかをみてきた。その結果横横系で最も変化を示している指数は玄室高指数②であることがわかった。また、注目したいのは羨道幅指数と玄室高指数①の関係である。数値自体では関連があるようには見えないのだが、グラフがほぼ同じ動きを見せることから相関関係がうかがえる。このことは横横系の石室を築造するにあたって羨道幅と羨道高、玄室幅と玄室高の比を同じくしているということができるだろう。一方横縦系の時期的変化を示している指数は、玄室幅指数、羨道幅指数、玄室高指数①、玄室高指数②と多岐にわたる。その中で横横系同様注目したいものが2つある。1つ目は玄室幅指数と羨道幅指数の関係、2つ目は玄室高指数①と玄室高指数②の関係である。まず玄室幅指数と羨道幅指数の関係をみると、グラフの動きが酷似している。つまり羨道幅が狭い時は玄室幅も狭くなり、羨道幅が広がると玄室幅も広がるという相関関係を持っていることが分かる。このことから玄室幅と羨道幅は築造において比率を計算されていたと考えることができる。次に、玄室高指数①のグラフと玄室高指



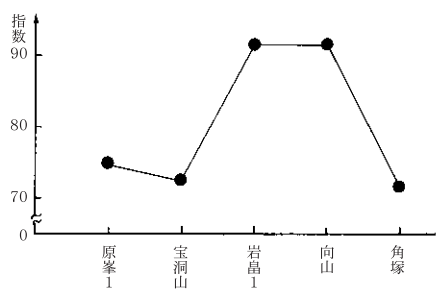
1. 玄室幅指数 (横横系)



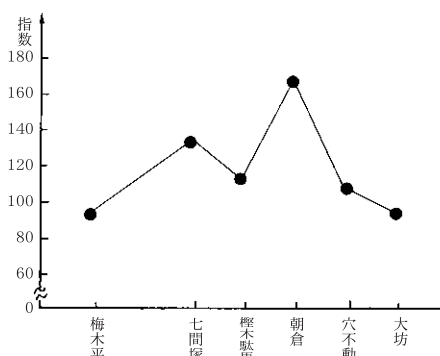
2. 玄室幅指数 (横縦系)



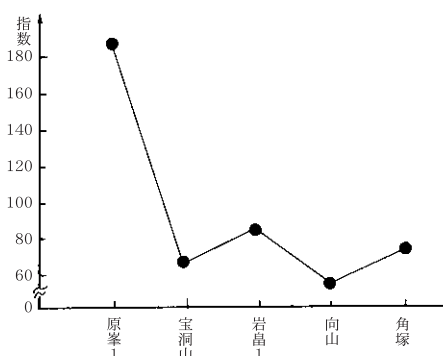
3. 羨道幅指数 (横横系)



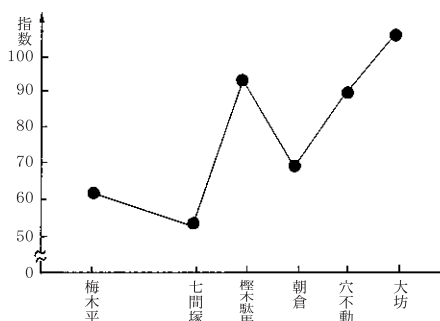
4. 羨道幅指数 (横縦系)



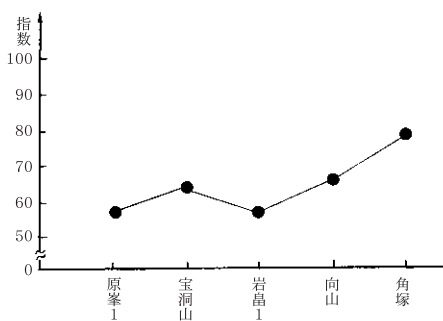
5. 玄室・羨道長指数 (横横系)



6. 玄室・羨道長指数 (横縦系)



7. 玄室高指数① (横横系)



8. 玄室高指数① (横縦系)

図1 角塚型石室の計測的属性分析 1

数②の関係である。このグラフにおいては反比例した動きを見せる。つまり羨道高と玄室高、玄室高と玄室幅との相関関係を持っているといえることができる。ゆえに横縦系は築造にあたり羨道幅、羨道高、玄室幅、玄室高すべてにおいて関連を持ちつつ変遷を遂げたといえることができるだろう。

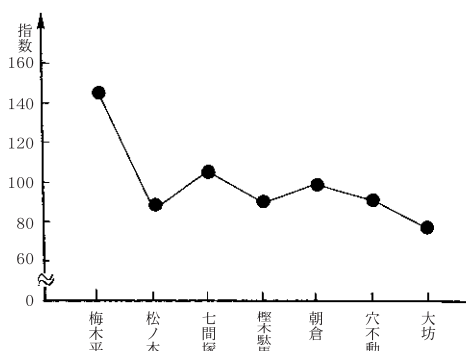
⑥側壁1段目高指数

玄室高に対する側壁1段目の石材の高さを指数化した。側壁1段目でもっとも大きな石を計測の対象とした。これにより玄室高に対する基底石の高さが理解できる。

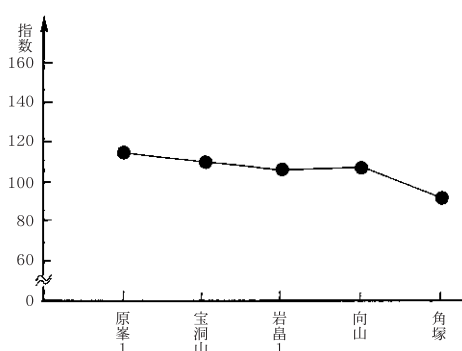
横横系：第1段階では側壁1段目の石材が占める割合が40パーセントほどであるが、第2段階になると73パーセント、第3段階になると100パーセントを占めるようになる。

横縦系：第1段階では50パーセントの割合を占めていたのが、第2段階になると88パーセントになり、第3段階には100パーセントを示すようになる。

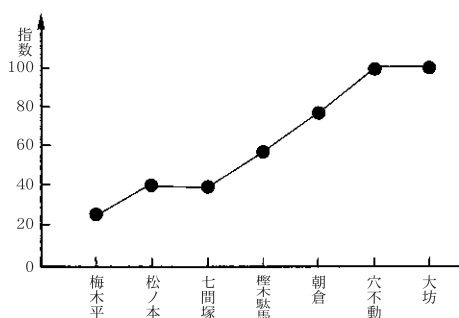
玄室高指数①からわかるとおり、時期が下るにつれ羨道高と玄室高の差が小さくなるのは、時期が新しくなるにつれ羨道の高さが高くなっていくのに対し、玄室の高さは低くなっているといった反比例の関係があることを示している。そしてその原理の背景には各系統において「段



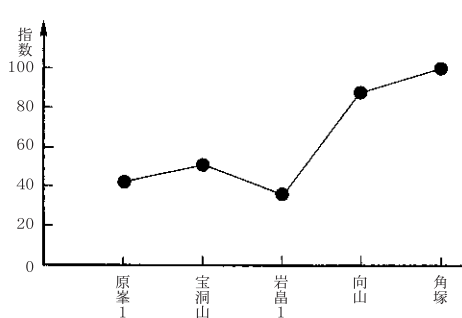
1. 玄室高指数②(横横系)



2. 玄室高指数②(横縦系)



3. 側壁1段目高指数(横横系)



4. 側壁1段目高指数(横縦系)

図2 角塚型石室の計測的属性分析2

数が減少するとともに玄室側壁1段目に大きな石材を用いる」という思想が第2段階を境に次第に強くなっていった背景が浮かび上がってくるのではないだろうか。なお、側壁1段目高指数は各段階で大きな差が認められる。この差は今後発掘調査が行われて数値に変動があったとしても前後関係までは影響を及ぼすものではないと考えられる。

3 編年試案

この章ではこれまでの非計測的属性、計測的属性による分析をもとに、各系統の編年試案を組んでいく。

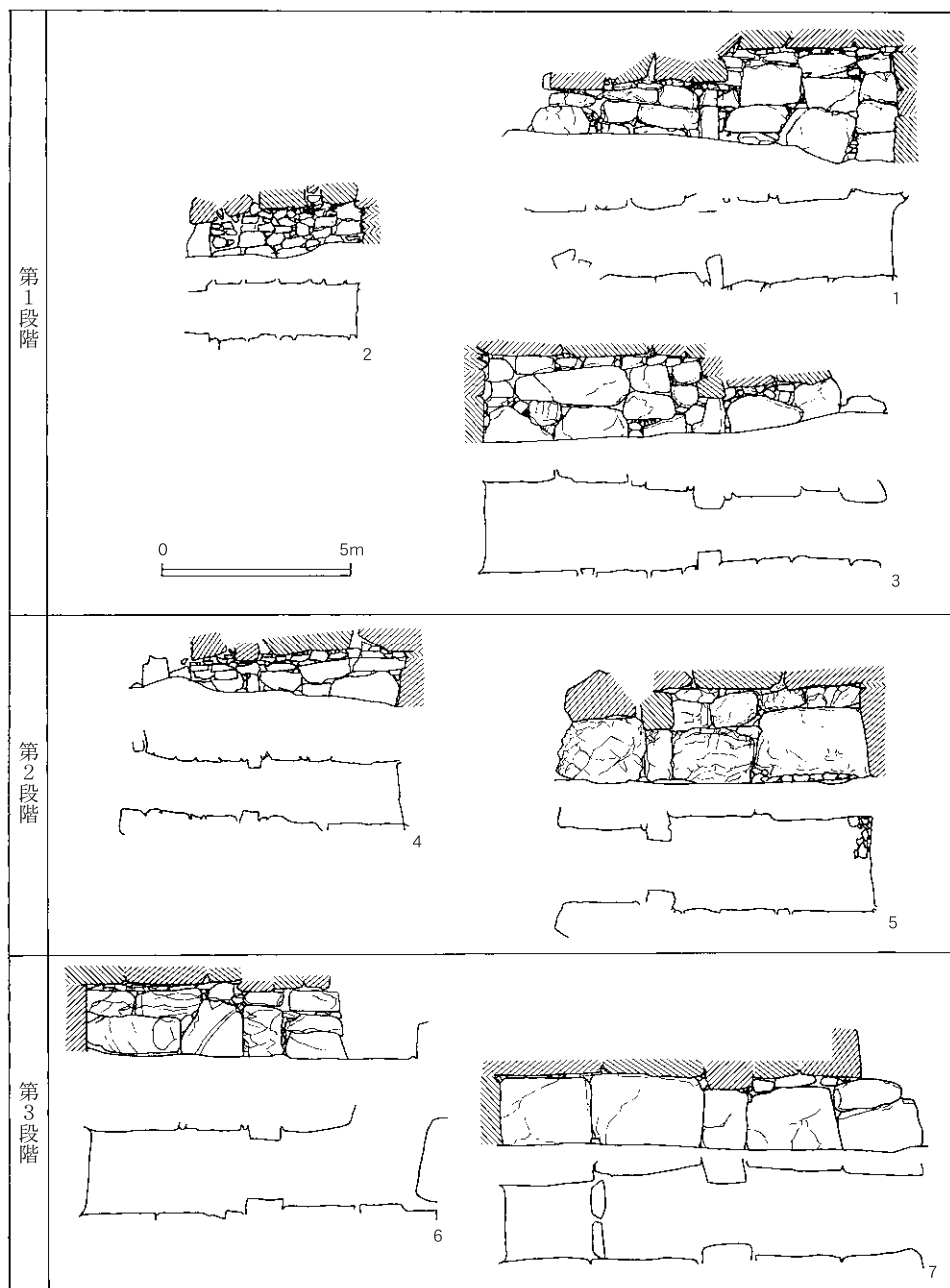
（1）横横系石室の編年

まずは第1段階から第3段階までに区別した属性が何であるのかを示していこう。横横系で時期差を明瞭に示す属性は石材の大きさ・段数、それに関わって側壁1段目高指数・玄室高指数①・玄室高指数②が変化する。これらの指数を元に変化の様子を見ていこう（図3）。

第1段階：側壁は4段あるいは3段である。側壁1段目高指数は40以下である。玄室高指数①は50から62。玄室高指数②は86～150と大きな数字を示す。

第1段階に分類される古墳は3基である。横横系の出現については後述するが、巨大な石室を持ち、かつ玄室側壁を四段で構成している梅木平古墳をこの段階のはじめに置く。梅木平古墳について、玄室幅指数や玄室高指数②で明らかとなったように角塚型石室の前身にあたりと考えられる。そのため第1段階内で最も古く置くことができる。次に、小型の石材（時に小石を）用い四段で構成している松ノ本古墳を置く。この古墳は計測値データに不明な点が多々あり、指数による分析は難しい。しかし石材の大きさ・段数・側壁1段目高指数から梅木平古墳の次に新しい石室を持つと判断した。そして第1段階の最後に七間塚古墳を置く。玄室側壁の段数が3段になり、玄室幅指数も徐々に上昇する傾向が見られることに加え、奥壁に接している玄室側壁1段目の石材が存在感を示すようになったことからこの位置に置くことが妥当であろう。

第2段階：側壁は原則2段で構成される。それによって側壁1段目高指数は58と84と第1段階より大幅に高くなる。同様に玄室高指数①も69から94と高くなり、玄室高指数②は80後半から100前後と低くなる。第2段階に分類した古墳は2基である。朝倉古墳と榎木駄馬古墳は酷似しており、近い時期に築造された可能性がある。石材が大型化してきたこの時期ではあるが、そのような中でも榎木駄馬古墳が小型の石材や小石を用いて築造されていることから榎木駄馬古墳を第2段階の初めに置いた。玄室高に対する側壁1段目の石材の高さの割合から判断するとこの位置で間違いはないだろう。次に朝倉古墳を置くこととなる。



1. 梅木平古墳 2. 松ノ本古墳 3. 七間塚古墳 4. 檜木駄馬古墳 5. 朝倉古墳 6. 穴不動古墳 7. 大坊古墳

図3 横横系角塚型石室の編年

第3段階：側石は1段あるいは2段で構成される。側壁1段目高指数は100である。玄室高指数①は第2段階よりもさらに増し90以上である。玄室高指数②は90以下となる。

この段階に分類した古墳は2基である。石材の大きさ、玄室高指数①・②から、穴不動古墳→大坊古墳と変遷していくと考えられる。

以上の変遷の様子をまとめ、次のような編年案を想定した。

第1段階：梅木平古墳→松ノ本古墳→七間塚古墳

第2段階：檜木駄場古墳→朝倉古墳

第3段階：穴不動古墳→大坊古墳

（2）横縦系石室の編年

横縦系の変化を示す属性は石材の大きさと側壁の段数である。その要素に加え、側壁1段目高指数・玄室幅指数・玄室高指数①・玄室高指数②も石室の変化を表すため、それらの指数をもって画期を見出すことができる。以上のことより横縦系を各段階に区別した画期を見出してきた。次に段階ごとの変遷を見ていく（図4）。

第1段階：側石は3段から4段で構成される。側壁1段目高指数は50以下である。玄室幅指数40から60未満。玄室高指数①は65未満、玄室高指数②は108から115の範囲である。

第1段階に分類した古墳は3基である。横横系同様、横縦系の出現については後述するが、小型の石材を用い、4段で構成している原峯1号墳を置く。また玄室幅指数・玄室高指数①、②からも原峯1号墳が横縦系で最も古いものといえる。次に使用する石材は大きくなるのであるが、まだ小型の石材や小石を用いて積んでいく方法をとっている宝洞山1号墳を置く。この古墳に関しても、玄室幅指数と玄室高指数②から原峯1号墳よりも新しいといえる。そして第1段階の最後に岩畠1号墳を置く。ひとつひとつの石材の大型化が見られ、玄室幅指数・羨道幅指数・玄室高指数②からも第2段階への移り変わりの時期に位置するということが如実に表れている。

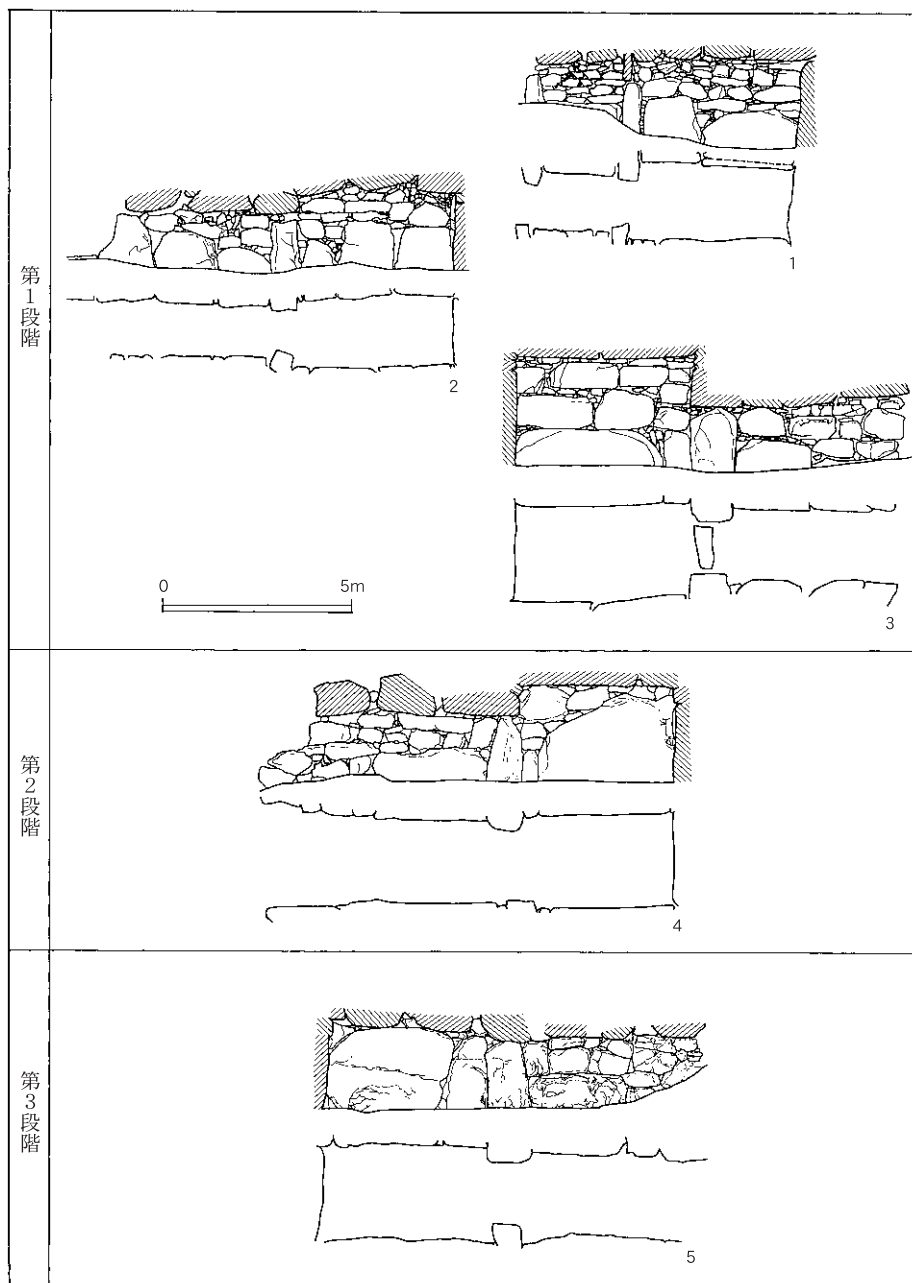
第2段階と第3段階に分類した古墳はそれぞれ1基ずつである。第2段階は宇摩向山古墳で、各段階の画期で示したように、使用する石材が大きくなり、2段で構成するようになる。またこの段階から玄室高に対する側壁1段目高指数が急激に高くなる。また玄室幅指数と羨道幅指数は第2段階である宇摩向山古墳で最も高い数値を示しているほか、玄室高指数①、②でも変化の様子を表している。第3段階は角塚古墳で、第2段階より上記の傾向が進んだことにより第3段階に位置づけられる。

以上の変遷の様子をまとめ、次のような編年案を想定した。

第1段階：原峯1号墳→宝洞山1号墳→岩畠1号墳

第2段階：宇摩向山古墳

第3段階：角塚古墳



1. 原峯1号墳 2. 宝洞山1号墳 3. 岩畠1号墳 4. 宇摩向山古墳 5. 角塚古墳

図4 横縦系角塚型石室の編年

4 2系統の相互関係

これまで横横系と横縦系の2系統に細分し、それらを3時期に区別して編年試案を組んできた。しかしそれらが後に角塚型と呼ばれるように類似した形態をとるようになったきっかけや、2系統に分かれているものにどのような関係性があるのかということに関しては疑問が残っている。このことに関して、各系統の分布状況を見ながら、また編年試案を駆使しながら考察していきたい。

（1）各系統の系譜

はじめに横横系の石室の出現を考えてみよう。前述の通り、横横系の最も古い段階に置いたのは広島県の梅木平古墳であるが、その後、愛媛県・高知県・徳島県と点在することとなる。中・四国地域の古墳はその地域ごとに特徴ある石室が展開しているが、角塚型石室はそうした石室の地域性にかかわらず各地で点在するように分布する。しかもその形態が周辺から影響を強く受けることもなく、まさに孤立した状態で点在しているのだ。そこから、角塚型石室を持つ古墳を築造する者の勢力や独自性を看取することができる。最も古い段階の梅木平古墳は、他の角塚型石室よりもかなり大きな石室を持つ古墳である。それはまた権力の象徴とも言えるであろう。そしてそこから派生していった横横系角塚型石室も、梅木平古墳を築造した者よりは劣ると思われるが、各地域で権力を持った者の権力の象徴であったのではないだろうか。それは山崎が考察しているような「地方豪族と中央有力豪族との同族関係が強化」された要領で、「四国地域の有力豪族と梅木平古墳を築造した者との同族関係が強化」してきた結果とも言えよう。また山崎は角塚型石室は畿内の影響を強く受けたものであるが、それは各地のA a型石室の基盤の上に、畿内型石室の影響を別々に受けて、A b型石室を成立せしめたが、畿内型切石積石室の直接の波及ではない（山崎1985：p. 365）としている。その論はA b型をとっている梅木平古墳の出現以前の動きを考察しているものであるが、そのように考えると横横系角塚型石室は自然な流れで築造されたものであるとすることができるだろう。

一方横縦系は、横横系とは違う出自を持っている。横縦系第3段階に位置する角塚古墳は、もともと香川県観音寺市（旧大野原町）においての古墳変遷の最終段階にあたる古墳である。その大元は椀貸塚古墳であり、その後平塚古墳→角塚古墳と変遷していく。北から椀貸塚→平塚→角塚の順で、約三百メートルの間隔を置いて3基の巨石墳が一直線に並んでいる。この3基は、石室形態から見て築造された順が明らかである。椀貸塚から平塚への変遷は複室構造から単室構造への簡略化であり、平塚から角塚への変遷は単室の石室における玄門立柱部の簡略化であったと考えられているが、椀貸塚型から平塚型の変遷は、単に石室の簡略化だけでなく、畿内型石室B b型・B c型との融合の中で行われたとみることができる（山崎1985：p. 360）。

山崎分類のB b型とは、玄門立柱が羨道側にせり出さず、玄門立柱を覆う天井石が羨道部と同じレベルで水平に並ぶもののことをいい、B c型も玄門が羨道側にせり出さず、玄門立柱を覆う天井石が羨道部と同じレベルで水平に並んでいるうえで羨道部に縦に石を立てることをせず、羨道部と同様に数石の石をもって積み上げるもののことをいう（山崎1985：p. 309）。山崎は平塚古墳と同じタイプであるA a型石室に、本稿で「横縦系角塚型」石室の対象としている原峯1号墳と七間塚古墳を挙げている。その理由としては計測的属性による分析で、平塚古墳と原峯1号墳、七間塚古墳の新旧は決め難く、ほぼ同年代を示すと考えているからである。山崎の考える平塚型と筆者の考える角塚型とは重複するものがあるが、平塚型から角塚型にかけての変遷の様子を表すには横縦系第1段階にあたる石室は必須であり、角塚型に含めた。ゆえに横縦系は平塚型から角塚型の変遷の過程から出現したものであるということが出来る。

（2）2系統の分布状況

横横系の分布は前述の通りだが、横縦系の分布にはある傾向がみられる。それはそのほとんどが角塚古墳周辺に存在しているということである（図5）。角塚古墳と向山古墳の密接な関係については知られているが、2系統に分けたことにより横縦系全体の密接な関係が表れることとなった。このような分布状況を踏まえ、もう一度変遷の様子を見て欲しい（図3・4）。第1段階において、横横系に比べ横縦系の方がより整った形態を持つことが分かる。言い換えれば横縦系が角塚型石室としての完成度が高いということがいえるだろう。これは横縦系の淵源である椀貸塚型・平塚型からの変遷の過程で出現したため、一定の形態を持ちつつ変化していった結果であろうと思われる。原峯1号墳の段階で急に何らかの影響を受け出現したものではなく、変遷の結果であると考えれば完成度が高いことに納得がいく。一方横横系の第1段階は、徐々に形態が定まりつつあるのだが形態の特徴をはっきりと説明できるほど整っておらず、側壁を1石積みするといった畿内の影響よりもA b型を採用する九州の影響を強く残したままであるということが出来る。しかし第2段階になると横横系は急激に整った形態を持つようになる。このことから第1段階

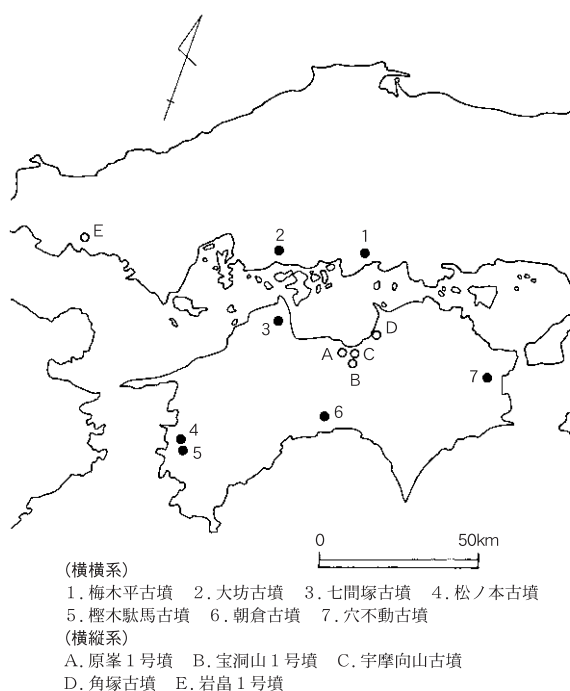


図5 角塚型石室の2系統の分布

と第2段階の間に横横系と横縦系による接触があったのではないかと考える。各系統とも第2段階から畿内の影響が強くなっている面からも接触の可能性があるといえる。2系統の接触では横横系の持っていた畿内の要素を横縦系がもともと培ってきた基盤の上に受けたと理解できるであろう。そして相互に関係を持ちながら横横系は香川県を除く四国と広島で、横縦系は香川県と愛媛県の極めて狭い範囲で発展を遂げたのではないだろうか。さらに、各系統の最後の古墳（横横系では大坊古墳、横縦系では角塚古墳）の築造を境に四国地方で大型古墳の築造がみられなくなる。この事実はそれまでの古墳形態が直接の波及ではなかったのに対し、角塚古墳や大坊古墳築造後に畿内の力を直接受け、支配され始めることになった表れなのではないだろうか。

角塚型石室を持つ2系統の古墳は別々の道筋で成立したが、第1段階と第2段階の境で接触を持ち、さらに畿内の影響を強めながら各地域に造られていた。しかしそれまで間接的に影響を受けてきた畿内の力がより強力に下されることにより、四国地域の古墳築造の終焉を迎えることとなったのである。

5 まとめ

角塚型石室における様々な非計測的属性・計測的属性を分析して、2系統3段階に分類した。また2系統は異なる系譜を持ちつつも、2段階では互いに交流があったと説いた。

角塚型石室はこれまで調査が少なく不明な点が多い。近年、角塚古墳や宇摩向山古墳、そして高知大学による朝倉古墳の調査が進んでようやくその内容が明らかになってきた。それでも不明な部分は多く、本稿はそうしたことから不十分な点もいくつか残したが、本稿が中・四国における古墳研究に少しでも寄与できれば幸いである。

参考文献

- 太田宏明 1997「畿内型石室の属性分析」『千里山文学論集』第58号 関西大学大学院文学研究科、大阪：pp. 101-130
- 大久保徹也 2009「大野原古墳群の基礎的検討」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会、徳島：pp. 501-510
- 國木健司 1995「香川の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第9回徳島大会資料 古代学協会四国支部徳島：pp. 15-38
- 高知大学考古学研究室編 2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学考古学研究室、高知
- 白石太一郎 1966「畿内の後期大型群集墳に関する一試行―河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として―」『古代学研究』42・43合併号 古代学研究会、大阪：pp. 33-64
- 清家 章 2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究』真陽社、京都：pp. 447-464

- 清家 章 2011「首長系譜の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』大阪大学大学院文学研究科、大阪：pp. 29-42
- 橋本達也 2001「四国における後期古墳の展開」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム：pp. 93-103
- 富田尚夫 1998「南予の横穴式石室」『遺跡36号』遺跡発行会、愛媛：pp. 147-158
- 松岡文一 1959「野々瀬群集古墳の調査」『愛媛考古学3』愛媛県考古学会 第2巻第1号
- 松岡文一 1960『川之江市史』第一輯古墳時代篇 川之江市教育委員会、愛媛
- 森下英治 1995『角塚－大野原中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告－』大野原町教育委員会、香川
- 山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究』科学研究費報告書（2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京に再録。拙論はすべて再録文献からの引用であり、引用頁も再録文献のページ数を示す。）

遺跡文献・挿図出典

朝倉古墳：本書

岩島1号墳：山崎1985

宇摩向山古墳：松岡1960。四国中央市教育委員会2009『宇摩向山古墳発掘調査報告書1』四国中央市埋蔵文化財調査報告2、愛媛

穴不動古墳：天羽利夫1973「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第6集 徳島県博物館、徳島

角塚古墳：観音寺市教育委員会2009『香川県指定史跡腕貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書』、愛媛

檜木駄場古墳：富田1998。なお、計測値は佐伯が实地に観察した結果を記している。

七間塚古墳：山崎1985

大坊古墳：山崎1985

梅木平古墳：山崎1985

原峯1号墳：山崎1985

宝洞山1号墳：松岡1960

松ノ本古墳：富田1998